

エレン(女) 『駆逐して
やる!』

とある漫画好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

駆逐してやる系女子エレン・イエーガーの初めての恋……

待ち受けてる試練……幾度の困難……現れる恋のライバル……

恋の行方は!?

もしもエレンが女子だったらという設定でやっています

初めての作品なのでどうか暖かい目で見守りください

目次

第三話	第二話	第一話
17	10	1

第一話

「はあ」

エレンの目覚めは憂鬱だった。

最近よく見る夢に悩まされているのだ。

夢の中の自分は男で立体機動装置を華麗に駆使し、巨人を何体も殺していた。

だが夢から覚めれば自分がか弱い女に戻っている。

どんどん大きくなってく胸と尻、低い身長、高い声。

どんなに洗面台の鏡を見つめても夢の中の自分とは重ならない。

鏡を見つめていると自分がだんだんと情けなくなってくる。

こんなことで本当に巨人達を駆逐できるのかそんな考えが頭をめぐり終いの果てに

は自分を卑下する言葉ばかり思いつく。

そんな自分にもう一度「はあ」とため息がでた

「どうした鏡を見てため息をつくなんて鏡の中の自分に見惚れてるのか？」

急に聞こえてきたその言葉にエレンは驚き体をビクツと震わせた

「はあなんだユミルか」

「人の顔を見るなりため息とはさすが自分の顔に見蕩れる奴は違うな」

「馬鹿、そんなことしていいない」

「じゃあなんだ？この前の訓練のときに頭をぶつけたのがまだ効いてんのか？かなり勢いよく行ったんだろ？ありやあ笑いもんだ

兵士になつてすらいなのに負傷兵になつたのはお前がこの世界で初だろうな」

正直エレンはユミルのことが苦手だ常にヘラヘラと笑い軽口を叩き人をイラつかせる。

だが、ユミルが本気を出せば成績上位10名に名を連ねるは楽なことだろう、だが彼女は本気を出さない

それは彼女のためなのだろう、彼女を成績上位10名にするためだが、その彼女はユミルの頭部を拳で軽く叩き母親のようにユミルを叱り付けている。

その様はなんだか微笑ましくもありなんだか笑えてくるものでもあった。

エレンがユミルに対してふつふつと湧いていた怒りが消えエレンの口からは「フッフ」と笑いがこぼれてしまった。

「てめえ今笑つたな？」

「コラー！ユミル！今は私が喋ってるでしょ！」

「わかつてるよ、クリスタ」

これ以上笑つたら後が怖いと思いつつ洗面所をあとにしようとするとエレンを引き止める声があった

「エレン、ちゃんと顔を洗わなきゃダメ」

これまたエレンが苦手とする人物が現れた

「うるせえなあちゃんと洗つたよ」

「嘘」

これもエレンがミカサを苦手とする要因の一つだ、ミカサはなぜだかエレンの嘘をよく見抜く。

ミカサはエレンの腕を強引に引っ張ると洗面所へ連れ戻し手で少量の水を救うとグイグイとエレンの顔に押し付け、ゴシゴシと洗った。

エレンがミカサを苦手とするもうひとつの要因が出た、この大胆で強引な性格、ミカサがエレンに接する態度は母親のようだった。

「自分でやれるって!」

「ダメ…エレンは手を抜く…次は口を開けて」

「だから!自分でできるって!」

「ダメ、エレンは歯磨きで手を抜き痛い思いをしたことがある…ので徹底的にやらないといけない!」

彼女には過保護的な面もあり、過剰なまでにエレンに世話を焼く。

それをエレンは嫌い跳ね除けようとするが、その抵抗も虚しく結局はミカサに押しきられてしまう。

今もそうだ抵抗の末エレンが折れ、ミカサが念入りにエレンの歯を磨いている。

その姿を見てユミルは爆笑しクリスタは小刻みに体を震わせながら笑いを堪えている。

エレンは心の底から思った（ああ、早起きしてよかった）と。

他人に歯を磨かれている姿は実に滑稽でおかしなものだ、エレン自身がこの場面に遭遇したのなら笑いを堪えきれないだろう。それを自分で分かっているからこそ心の底から思う。

（もう……やめてくれよ）

洗面所をあとにしたエレン達は食堂にいた。

当たり前のようにミサカが隣にいて当たり前のようにアルミンが隣にいる。ミカサは黙々と食ベアルミンは不気味で恐ろしいことを語っている。いつもの何気ない日常だ。

今日も今日とて巨人を駆逐するための鍛錬にはげまなければならない。

だが、エレンには不安がある。

(本当に私は、巨人を駆逐せるのか?)

「はあ」

また、エレンの口からため息がこぼれた

「エレン、ため息は幸せを逃がす」

「ごめん、ボクの話がつまらなかつたかな」

「いや、そんなことねえよもつと聞かせてくれ」

「そう?じゃあ…だからこのままいくと立体機動装置に使われる燃料は……」

最近の自分はおかしいとエレンは感じていた。

不安なことがあるとなぜかライナーに視線が行ってしまう。

そしてライナーと目が合いそうになると目をそらす。

こんなことの繰り返しだ

やはり最近の自分はおかしい…エレンは再びそう思った。

ライナーのことを考えると体の中心から暖かくなるような感じがする。

「……」

エレンの頬が赤くなっていく様子をミカサだけが静かに見ていた

ココは格闘訓練場

今日もまた金髪の大男が華奢な少女に投げられている。

「ぐはあっ」

「よしー！」

「全く大したもんだ女なのに俺を投げ飛ばすとはな」

「そうか？」

「ああほんと…大したもんだよ…だがなんでたつて俺ばかり投げ飛ばす」

「ライナーは投げやすいんだよ」

「だからってバカスカ投げられるところちも大変だ」

対人格闘は唯一エレンが得意とする科目だ。

だからかいつも対人格闘訓練の時はいつも調子づいてしまう。

「よし、じゃあ次はライナーが襲ってくる番だ」

「次もだろ？また俺か」

2人がもう一度戦いの姿勢に入ると上から何かが降ってくる。

あれは鳥か？馬か？いや、ジャン・キルシュタインだ。

ジャンは「ぐええー！」と断末魔をあげ白目を向いていた。ジャンを投げ飛ばした張本人が顔を顰めて近寄ってくる。

「次…私がそいつを使いたいんだけど……」

「ちよつとまでよ、今私がライナーとやってるだろ…アニ」

「さつきから見てたけど……ライナーを投げ飛ばすだけで全く進歩してる様子がない

私の方がそいつを有効活用できる」

「有効活用ってどんなことだよ……」

「アンタには知る必要が無い……」

ア二とエレンが睨み合っているなか、ライナーは何も出来ず座っていた。

「じゃあライナーに決めてもらおうぜ」

「え」

「エレンか私か選びな」

「いや、その…俺はどうせ投げられるならどっちでもいい…かな」

人差し指で頬をポリポリとかきながら忍びなさそうにそう言うライナーを2人は冷たい目をしながらライナーに歩み寄る。

その冷たい視線を感じていたライナーは覚悟を決め身を任した。

だが次の瞬間上からまた何かが降ってくる、あれは鳥か？超大型巨人か？いや、ベル

トルト・フーバーだ。

ベルトルトは「ああい」と微かにうめき声をあげ白目を向いていた。

ベルトルトを吹っ飛ばした張本人が険しい顔をしてやってくる

「エレン…同じ相手とばかりやっていても実践的じゃない…だから私とやるべき」

「良かったね代わりの相手が見つかった」

ア二は座り込んでるライナーに手を差し伸べ、ライナーはその手に応えア二の手を掴

み立ち上がった。

ア二は手を握ったままライナーを引っ張って連れて行ってしまった。

（なんでだ……ライナーがアニに連れて行かれてるだけなのに……心がぎゅうって締め付けられてるみたいだ……）

第二話

エレンの目覚めはなんだか憂鬱だった。

それは今日見た夢のせいだろう。夢の内容はライナーと夜の草原で共に星を眺めるといふものだ。

星を眺めていた2人は気持ちが高まり…唇を近づける……そこで夢から覚めた。

「最悪だ……」

そんな言葉が口から零れた。

今の自分は完全にどうかしてる、病気かもしれない。

そんな考えがエレンの頭を巡る。

「はあ」

癪になってきたため息が今日は一段と大きくでた。

(これが病気だとして誰に相談する？教官か？いや……ダメだ開拓地送りにされちまう……座学に詳しいアルミンか？でもアイツに心配をかけるのも……ミカサは……論外だよなアイツに相談したってきつとろくなことにならない)

「ちよつとサシヤ相談したいことが……」

エレンが悩みに悩んだ末相談しよと思つたのはサシヤだった。サシヤは田舎仕込みの知識があり何かと頼りになったりもする。

エレンはサシヤを兵舎の裏に連れ出し今の自分に起きてることを説明した。その上で返つて来た回答はエレンにとって衝撃的なものだった。

「エレン……それは病気です」

「やつぱり……そうだよな……」

サシヤに病気だと断言されたのはショックだった。

自分でもそうなんじゃないかと分かつていても、やはり病気だと言われるのは心にくる。

すぐにエレンは不安になった。だがこの不安は杞憂に終わる。

サシヤは突然エレンの肩を両手でがっちり掴むと

こう言った

「それは恋の病です！」

エレンは呆気に囚われたが直ぐに「はあ？」と口に出た。

エレンはサシヤに相談した自分が馬鹿だったと思った。

「何言つてんだよ！」

「ええ……？だつて今の内容を聞くに貴方はその人に恋……してますよ？」

自分の唯一の賢い行いはライナーの名前を伏せてサシヤに話したことだとエレンは深く思った。

「はあ！お前に相談した私が馬鹿だった！」

そう吐き捨てエレンは駆け足で走りさろうとするエレンをサシヤは腕を掴み引き止める。

「ちよつ……待つてください！もつと話を聞かせてください！……こんな生殺しですよ！きつかけ！きつかけだけでも！」

「離せ！」

「そ、そうだ！これは本当に病なんですよ！恋の病が進むと心臓がはち切れて死にますよ！」

サシヤはエレンを引き止めるため苦しいでたらめを並べた。

明らかに嘘だとわかるが、それ以上にエレンは純粹だったのかはたまた言わゆるアホの子なのか。それを信じてしまった。

「そ、そうなのか!？」

「!」

これをチャンスだと思ったサシヤは、いつものサシヤとは思えないほどの頭の回転の速さ次々とでたらめを並べる。

「ええ!・そうですよ!・胸　心臓ががはち切れて死にます!」

その人が他の女性といると胸が痛くなったりしたことありませんか!？」

「あ……」

エレンには心当たりがあった。

「あるんですね!？」

「……」

エレンは答えなかった。

だが、サシヤにはそれが自分の質問への答えだと理解した。

「恋の病の治療には誰かに話すことも重要です」

「わ、わかった……」

「まずは恋した……ゴフン恋の病になったきっかけを」

——思えばライナーに対してこのような体の異状が現れるようになったのはいつだろうか。

そう考えながら記憶の道を辿りきっかけを思い出ししていく。

——そうであれば確か立体機動の訓練中の事だ。

その立体機動の訓練は至って簡単なものだった。

立体機動装置で森の中を移動し目的地までたどり着くそれだけだった。

——だが、私はミスを犯し地面に転げ落ちた、それを見たライナーが駆け寄ってきてくれたんだ。

「エレン……少し休んだ方がいい、死んじゃうぞ」

——私はは地面に膝をつき俯いたままだった、それは自分の情けない姿に泣きべそ

をかいていたからだ。

「ハア…ハア…クソツ！ライナー…どうしたらお前やミカサみたいになれる…このままじゃ私は何も果たせないまま終わっちゃう…」

——せっかく我慢していた涙が零れ落ちた。

「ただ…やるべきことをやる」

——私はライナーを見上げた

「ただ進み続ける…それしかねえだろ」

ライナーは私の手を握って起き上がらせてくれた。

「ああ…そうだよな…進み続けるしかねえよな」

「巨人を一匹残らず駆逐すんだろ？お前ならやれる」

——その時からだライナーに対しての鼓動が変わったのは…

「じゅ、純愛！」

サシヤは大声を出し飛び跳ねた

「なんとこの甘酸っぱさか！」

「し、静かにしろよ！教官に怒られるぞ」

エレンはサシヤの口を慌てて手で塞ぐ。

「そ、それで恋の病？ってやつのは治し方は知ってるのか？」

「ええもちろん」

サシヤは不敵な笑みを浮かべた

「それはその人と付き合えばいいんですよ」

「は、はア!？」

今度はエレンが大声を出した

第三話

「はア？なんで好きでもねえやつと付き合わねえと行けねえんだよ！」

サシヤはここまできて好きだと自覚が無いエレンに驚きだが、エレンの恋を叶えるためにもその事は押し殺し殺しエレンが納得しそうなもつともらしい嘘を並べる

「ですから、治療のためですって！」

「治療つて薬とかじゃねえのかよ！」

「未だ、この病気に特效薬ないんですよ！ゴホツゴホツまあ、強いて言うのなら愛のある……」
「ホツ」

サシヤの言っていることは後半聞き取れはしなかったが、特效薬が無いというサシヤの言葉はエレンにとって、大変ショックなものだった。

「特效薬がない？」

「そうです！ですからその病気を治すにはその人と付き合うしかないのです！」

「嘘だろ……」

（まあ嘘なんですけど……）

サシヤの言うことを次々と真に受けるエレンの純粹さにサシヤは心が締め付けられ

た。

「わ、わかった…それしか、ないのなら…やる」

「それで、その相手は誰なんですか？」

「は？」

「恋して…ゴホン…恋の病にかかってしまった、相手つてのは誰なんですか？」

「いや、その……」

エレンはライナーの名前を出すのが照れくさくて言うのを躊躇した

「さあ！教えてください！これも治療のため！サア！」

早く言えと言わんばかりにグイグイ詰め寄るサシヤ

「やっぱ…この話なし！」

それを突き飛ばしエレンは頬を真っ赤にして走り去って行く。

（はア!? 私がライナーと付き合う!?）

付き合うことを意識するとよけい照れくさい。

そんなに走っていないのに自分の心臓の鼓動が早くなってるのが分かる。

（バカ！何考えてんだよ！治療のため！治療のためなんだぞ!? 私がライナーのことを好きとかそんなじゃないんだぞ!?)

自分の考えを振り切るためエレンはさらに加速する。前もよく見ず角を曲がると

…

ドン！

案の定人とぶつかる。

そのガツシリとした体幹にかなり勢いがあつたからかエレンはふらつき転びそうになるが手を掴まれ、持ちこたえる。

「わ、わりい」

エレンが先に謝るがその男は「大丈夫か？」と心配してくれた。

その男の声は聞き覚えがあつた。

「ら、ライナー！」

「？」

突然自分の名前を叫ぶエレンにライナーはハテナマークを浮かべた。

エレンはと言うと状況を理解するのに数秒かかった。

エレンは手を握りしめられている、ライナーに。

その状況をエレンは理解すると鼓動が益々早くなり、何を混乱したのか握られている手を利用し、ライナーに一本背負いを食らわせてしまった。

「グホッ！」

「す、すまん！急いでるから！」

ライナーは訳がわからないまま投げ飛ばされ、エレンは訳の分からないまま走り出した。

寝付くに寝付けない。

最低のバッドコミュニケーションをとってしまった。

出会っていきなり一本背負いされる人の気持ちはとても最悪なものだろう。

されたことがなくても分かる。

なぜ、自分はあるなこととしてしまったんだろう。

エレンはその後悔していた。

ライナーはその後食堂であったが目も合わせてくれなかった。

エレン自身も目を合わせれなかった。

当たり前だ

エレンはあれもこれも恋の病のせいだと思った、そう思えばそう思うほど治療を早め

たくなるが、そう思えばそう思うほど治療法はアレしかないんだと思い詰める。「はあ」と大きくため息をつき覚悟を決める。

エレンは隣でイビキをかいて寝ているサシヤを小突いて起こした。「なんえすかあ」

寝起きだからかサシヤの呂律は回っていない。

「な、なあその……付き合うってどうやれば出来るんだ」

そうだ、付き合うと言っても恋人同士になるんじゃない治療のためだしやがないだ

だ エレンはそう割り切ることにした。

「ムフフ待つてましたよ！その言葉！それで相手は誰ですか!？」

（治療のため治療のため、恥ずかしくない恥ずかしくない）

エレンは自分にそう言い聞かせる。

「ラ、ライナー」

エレンは聞こえるか聞こえないかの声で言ったが、サシヤは余裕で聞き取った。

「なるほど……それは敵が多いですねえ」

「そ、そうなのか？」

「ええ……ライナーは結構モテますからねエ……」

（そうだよな……ライナーなんだからモテて当然だろ！

だけどなんだ？この胸のチクチクは……

これも恋の病のせいかな？

「これは厳しい戦いになりますよ！共に頑張らしましょう！」

「あ、ああ言っておくけど私はライナーのことが好きじゃないからな？治療のためだからな？」

「分かってますつてえくもうヤダなあ」

サシヤはニヤニヤを必死で抑えひきつった顔でそう言った。

（本当に大丈夫か……？）

「そ、それと今日さ……」

エレンは今日ライナーにした事をそのままサシヤに話した。

「ええ……」

流石のサシヤもドン引きしていた。

「分かりました！まずは明日ライナーに謝りましょう！」

話はそれからです！」

「お、おう！」

エレンの戦いはここから始まる